〈小説〉選考委員特別賞

いちはら恋歌

東京都足立区　小野　みふ

夕方、私はプレゼン資料をまとめて、マウスから手を離した。

「ほっ、終わった」

湯呑を持ち上げて、あったかいお茶を一口。窓から風が吹き抜けて、やさしく頬を撫でる。

毎週水曜日、五井駅近くのホテルでリモートワークするようになって、早数カ月。手頃なデイユースながら、存分にリフレッシュできてよい。

ルルルルン、ルルルルン　♪

スマホのビデオ通話ボタンを押すと、課長のごっつい顔がドアップで映し出された。

今日の背景は、ヤシの木が並ぶビーチ。なんちゃってハワイからだ。

「おっ、峰さんは浴衣を着て温泉気分か。いいねえー」

ド派手なTシャツを着た課長が、うちわで扇ぎながら相好を崩す。坊やがそばで遊んでいるのか、太鼓の音がドンドコ聞こえる。

「明日はみんな出社する予定だから、チームミーティングするぞ」

「は、はい」

あわててメモ帳を探そうと、どこにも見当たらない。散乱する書類の上から、手でぽんぽん叩いてみる。それらしき感触がなくて、机上のメモホルダーから一枚取った。

「……でさ、もう少し詳しいインクワイアリーをよろしくたのむよ」

「かしこまりました」

「アロハ！」

通話がぷちっと切れて、画面はまっ黒だ。メモ紙に視線を落として、kuiの上に赤ペンでバツ印をつけた。

「調査は、qui（キューユーアイ）だよね」

正しいスペルに直したあと、小首を傾げた。新しいメモ紙に、ざっと走り書きがされている。

『五井に来て淡い微笑み漏らす吾の』

右肩あがりの、やや角ばった字。まだ続きがあるような中途半端さを感じて、指折り数えてみれば、五、七、五。短歌の上句だろうか。

ふと幼馴染だった寧音の顔が思い浮かんだ。中学生のときに短歌にハマっていて、単語カードに書き写したお気に入りをよく見せてくれた。

国語で習った和歌は古臭く堅苦しいイメージだったけど、こんなラフなのもあるのかと驚いた。試しに詠んでみたら、「センスあってイケるじゃん」って褒められた。だけど当時、文学よりソフトテニスに熱心で、そこまでのめり込みはしなかった。

吾は、『私』って意味だ。どうですかって、問いかけられているような。もしかして、上句と下句を互いに詠み合う連歌ってやつかも。

寧音は卒業後すぐに、父の転勤で海外に引っ越した。
今頃、何をしているだろう。元気にやっているだろうか。
湯呑にお茶を注ぎ足しながら、メモ紙に目を落としてぼんやり考えてみる。
――kui、qui、くい、悔い？
連想ゲームみたいに展開していって、熱い緑茶をぐびっと飲んだ。
『悔いも憂いも溶けて夕焼け』
頭にぱっと浮かんだ、下の句。
余白に綴ってからホルダーに戻そうとして、手を止めた。
掃除中にゴミ箱に捨てられてしまわないように、わざわざ二枚目に置いたのかもしれない。
「よし、私も」
メモ紙の上に白紙を重ねて、パチンと留めた。
柔らかく頬を緩めて、せっせと書類をかき集める。革鞄にノートパソコンといっしょにA4サイズの紙束をつめこんで、鼻歌交じりに部屋から出た。フロントに鍵を返して、渡り廊下を奥へ進んでいく。
女湯の暖簾をくぐって、仕事帰りに癒しのひとっ風呂。自前のラベンダー色の浴衣を脱いで、もうもうと立ち昇る湯煙の中へ。
（やったね。誰もいなくて、ラッキー）
足をうんと伸ばして、天然黒湯温泉に浸かる。赤々と燃える夕焼けが、じわりと目に沁みる。
失恋した日、振り切るように自宅のある三鷹と反対方向の千葉行きに飛び乗った。まっすぐ帰ったら、ポテチと酒まみれになってしまいそうで嫌だった。そこで、定期券のなけなしのチャージ分を使って、行けるところまで行こうと決めた。
終点の千葉駅までぼんやり過ごして、ＪＲ総武線から内房線に乗り換えて五つ目。辿り着いたのが、房総半島の西部に位置する市原市の五井だった。
戸惑ったようにはにかむ年下彼氏の背後にちらつく、見知らぬ若い女の影。会えなくて辛かっただなんて、見え透いたやさしい嘘に過ぎない。
結婚を意識して、真剣に交際していたはずなのに。毛布に包まりながら、二人の未来について赤裸々に語り合ったのに……。
本当は、薄々気づいていた。彼の気持ちが自分から離れていくことに焦って、すがって嫌われるのが怖くて、仕事に逃げたんだ。
惨めになりたくなくて、意固地になっていただけ。
日は、また昇る。もう、逃げやしない。
東京湾に沈みゆく姉崎いちじくみたいな夕日を望みながら、私は大きく頷いた。

あくる週、すばやくチェックインして、予約した通り二階の角部屋に通してもらった。まっ先に奥のテーブルに急いで、まっさらな紙をひらりと捲ってみる。
新たな発句はのっていない。ただのメモだったのだろうか。
半ば諦めつつ、次の週にもう一度見てみると――。
『夕焼けに勇気もらって月光よ』

あった。なぞなぞのようなお題に、ドキッとした。
月光か。いつも日帰りだから、月を見たことはない。見てみたい気がする。
ちょうど課長は出張中だ。新規プロジェクト始動を祝って、明日もここでテレワークしよう。
もっともらしい理由を前置きしながら、フロントに電話して一泊することにした。
いつにもましてはりきって仕事をこなして、路地裏にひっそり佇む趣深い割烹料理屋に入った。
加茂菜漬けをつまみに、白地に黄色いラベルのクラフトビールをゴクゴク飲む。のんびり寛ぎながら、心ゆくまで房総グルメに舌鼓を打っていく。
竹の子の茶碗蒸し、旬のお刺身盛り合わせ、かずさ和牛の鉄板焼き……。
気軽なひとり晩酌に、とっぷり酔いしれた。
「あー、お腹いっぱいで幸せ」
すっかり満足して、露天風呂にゆったり浸かる。漆黒色のお湯をひと掻きして、頭上を仰いだ。
澄んだ夜空に、三日月が貼りつくように浮かんでいる。まるで鋭利な刀のようだ。
古代の歌人になった気分で、唇を動かしてみる。思いつくままに数首、数十首と詠んで、ビシッと決めた。
『もろき心を射(さ)すな晒(さら)すな』
部屋に戻って、忘れないうちに渾身の七七を書き添える。メモ紙を裏返して、私も訊いてみたくなった。
『浴衣着てけふ一番のたのしみは』
――『星にエールをイチハラエール』
翌々週、返句を読むなり、喉が鳴った。
イチハラエールは、市原市初のすっきり爽やかな味わいが魅力の地ビールだ。この前、割烹屋で注文した。自分の上句と通して読んで、一杯飲んだあとに似た清々しい余韻に満たされていく。
（会ってみたいな。どんな感じの人なのだろう）
期待に胸を膨らませながら、迷わずペンを握った。
『公園のケヤキ広場で待ち合わせ』
――『九日二時に上総更級』
これまでのやりとりから推測するに、相手は隔週で泊まっているらしい。
私はユーモラスな誘いにのって、二週間後の日付をパズルのようにぴったり当てはめた。カッコ書きで、（瑞希）と名前もつけ足した。

来たる七月第一週、穏やかな日曜日の昼下がり。
私はいそいそと五井駅から歩いて、いくぶん早めに上総更級公園のケヤキ広場に着いた。
幼い子どもたちがジャブジャブ池で遊んでいる。ひとまず木陰に入って、ハンカチで額の汗を拭いた。
「ふうー、暑いな」
灼熱の太陽が燦々と照っている。ブラウスの襟を正して、バルー

ンスカートのウエストリボンをきゅっと結び直す。腕時計とにらめっこしながら、とたんに鼓動が加速していく。

こんな気持ち、久しぶりだな。元彼の肩に寄り添う自分の姿がぽっと浮かんで、かぶりをやんわり振った。

とっくにあきらめたつもりなのに、まだズルズルと引きずっている自分に辟易してしまう。

（どうしよう。安易な約束をしちゃったかな。たった数回、連歌を交わしただけで、見知らぬ男と会おうだなんて……）

急に不安の波に襲われて、目印に持ってきたホテルのリーフレットを革鞄に仕舞いかけたそのときだ。

力強い足音が近づいてきた。斜め下にぼんやり向けていた視界に、ダークブラウンの革靴がすっと映り込む。

「瑞希さんですか」

「……はい」

私はおもむろに顔を上げた。

麻のネイビージャケットに、シックな黒デニム。男は胸板が厚く、がっしりしている。手元のリーフレットを指差されて、控えめに挨拶した。

「はじめまして」

「どうも。公園を一周してから休憩しませんか」

「ええ、そうですね」

「さっそく行きましょう」

男と並んで、四季の路に沿って歩いていく。

葉洩れ陽が降り注いで、キラキラ眩しい。赤ちゃん連れから仲睦まじい老夫婦まで、大勢の人たちで賑わっている。

広々とした公園から抜けて、こぢんまりした喫茶店に着いた。

重厚な扉を引いて一歩足を踏み入れると、コーヒーの豊かな香りに包まれた。冷房が効いていて、ひんやり涼しい。

「いらっしゃいませ。こちらへどうぞ」

ウエイターに通されたのは、窓辺のテーブル席だ。ソファに腰を下ろして、男と向かい合わせに座った。

「改めまして、戸田航と申します」

礼儀正しく会釈されて、私も、「峰瑞希です」と名乗った。

（年はいくつくらいだろう。私と同じ二十代後半か、もう少し上か）

ストローでアイスカフェオレをかき混ぜながら、チラチラ窺ってみる。すると、探るような眼差しを察したのか、航が気さくに自己紹介し始めた。

「ぼくは脚本家の端くれでしてね。大学を卒業したあと、数年ほど下積みして独立したところなんです。今、市原を舞台に新作を書いているんですよ」

「どんな内容なんですか」

「房総エリアで繰り広げられる、青春謎解きストーリー風かな」

「完成が楽しみですね。そうそう、航さんのメモ紙に書きかけの短歌を見つけて、謎かけっぽいなって胸が躍りました」

いたずらっぽく舌を出すと、航がひょいと肩を竦めてみせる。

「阿須波（あすは）神社で万葉歌碑に触れて、ちょっと遊んでみたくなったんです。瑞希さんから返事があって、飛びあがるほどうれしかっ

たな」
「私も航さんの返句を読んで、ワクワクしちゃった」
　明るく答えて、頬をほんのり赤らめた。初対面ながら、調子に乗って馴れ馴れしかっただろうか。氷が溶けて薄まったカフェオレを飲んで、改まって訊ねた。
「普段から短歌を詠まれるんですか」
「高校のときに文芸部に入っていまして、松尾芭蕉から太宰治まで一通り触れたんですよ」
「へえー、文芸部に？」
「バスケ部と掛け持ちしていました。文芸部が存続危機だからって、クラスメイトに強引に引きずり込まれたんです。でも、おかげで古典の面白さを学べてよかったかな。瑞希さんこそ、短歌をやっていらしたんですか」
「いいえ、特に……」
「本当ですか。うまくてびっくりしました。特に衝撃を受けたのは、ぼくが投げかけた月光に対する返句。もろき心を射すな晒すな、って。いやあ、ぐさりと来ましたよ」
　航が拳で胸をとんと叩いて、興奮気味に話し続ける。
「あの下の句を読んで、会ってみたいと突き動かされましてね。男の人か女の人か、どっちかなと思っていたんですが、まさかこんな清楚な美女から紡がれた言葉とはなあー」
　大げさに褒められて、私はややぎこちなく微笑んだ。
　初めてメモ紙を見たとき、癖のある角ばった字から男だと疑わなかった。そのあとの返句を読んでも、勝手に男の人だと思い込んでいた。
　もし女の人相手だったら、はたして会っていただろうか。
　徐々に惹かれていって、いつのまにか微かな恋心を抱いていたらしい。
　航がどうやら同じ気持ちでないと知って、ショックでないと言ったら嘘になる。と同時に、下心から誘ったわけでないことに少し安堵して、私はガラリと話題を逸らした。
「お住まいは、お近くですか」
「いいえ、都内でアパート暮らしですよ。近頃は市原市内の宿を泊まり歩きながら、集中して執筆しているところです。瑞希さんは？」
「私は三鷹に住んでいて、アパレルメーカーでマーケティング職に就いています。週に一度、自分へのご褒美を兼ねて、リモートワークしに来てるんです」
　こっぴどくフラれて、成り行き任せに市原に辿り着いたことは伏せておいた。元彼の無邪気な笑顔が、スーッと薄れていくようだ。
「おっ、いっしょ。ぼくも好きな仕事に精を出して、毎日ご褒美ワークですよ」
　やおらウインクされて、鼓動がドクンと跳ねる。照れ隠しに腕時計を見やれば、もう五時過ぎだ。
　さっきケヤキ広場で会ったときは、踵を返そうか迷ったくらいなのに、今はもっといろいろ知りたいと思うなんて。
「もう夕方か。夢中で話し込んで、あっという間だな」

「ほんと、あっという間ですね」
ちゃんと出会ってよかった。航と楽しい時間を共有できて、うれしい。
「わあー、すてき」
レジ横のお土産コーナーに、とりどりの陶器が並んでいる。小鉢から深皿まで揃っていて、上品で美しい。
私は思わず両手をパンと合わせた。いいモノを見つけたときに、ついやってしまう昔からのクセだ。
「どれもフォルムが斬新で、味わい豊かですね」
航がリュックサックからコンパクトな一眼レフを取り出して、首からストラップをぶら下げた。シャッターをカシャカシャ切って、「どうかな?」と見せてくれる。
「とてもお上手ですね」
「仕事で資料集めするのに撮り慣れてますから」
ゴツゴツした強靭な手。丁寧でゆったりした口調。大人の余裕を湛えた、柔和な微笑み。
大らかで落ち着いた雰囲気を纏っていて、さも頼もしく守ってくれそうだ。胸がきゅんとしてしまう。
ふいに湧き上がったときめきを抑えるように、革鞄からスマホをつかんだ。
「私もっ」
中腰になって、平台に飾られたオーバル皿にフォーカスした。
「写真って、短歌に似てますよね」
航が得意げにカメラを持ち上げてみせる。
「短歌に?」
「どの角度からどう切り取るか、いかに魅せるか。ピカッと光るセンスが、何より大切だと思いますね」
「もっとセンスを磨いて、華やかな短歌を詠みたいな」
私は歌うように答えた。
「お茶を飲んで、リラックスしながらねっ」
航がにんまりして、カウンターに丸みのあるマグカップを二つのせる。
「お会い頂いたお礼にプレゼントしますよ」
「いや、でも……」
「瑞希さん、仕事も短歌もお互いにがんばりましょう」
「そうですね。どうもありがとうございます」
私たちは紙袋を揺らしながら、にこやかに店を後にした。

雨上がりの午後。急須でお茶を淹れたところで、スマホが鳴った。
航からだ。通話ボタンをタップすると、液晶画面に白磁のマグカップがくっきり映し出された。
「すごーい。茶柱が立ってるっ」
「瑞希さんに幸運をおすそわけしたくって」
「うれしいな。私もね、ちょうど食後の一杯を飲むところ」
「乾杯!」
航と声をそろえて、マグカップを掲げた。
「脚本はどう? 進んでますか」

「ぼちぼちかな。息抜きしたら、またはりきって筆を走らせるぞ」
航がガッツポーズしてみせる。
「がんばってください！」
私も元気よく言って、小さなガッツポーズを返した。
乾杯を重ね市原ひと巡り
　　ふた巡りして羽ばたいてゆく
まろやかな恋は、始まったばかりだ。ありったけの思いを三十一音にのせて、香り高い佐倉茶をそっと啜った。

週末にパソコンデスクの引き出しを開けて、カードをつかんだ。路地を抜けて、近くの図書館まで自転車を走らせる。
久方ぶりだ。中学生のときまでよく来ていて、受験勉強中は毎日のように通った。上階の自習室で勉強してから、ファッション雑誌を捲るのがお決まりのパターンだった。
「あれ、こんな狭かったっけ。もっと広い本の海って感じがしてたんだけどな」
私は分館の自動ドアから入って、すいすい進んだ。絵本の読み聞かせ会でも催されていたのか、親子連れが数組、おしゃべりしながら脇を通り過ぎていく。
　　母の手をつなぐもみじ手ふつくらと
　　夢の続きを語っているよ
幼い頃の思い出を振り返って、唇から言葉がなめらかに流れた。イケてるかどうかは、別として。
（寧音は短歌を詠み続けているかな。航としたみたいに、連歌を交わしたら楽しそうっ。短歌にゾッコンな私を見たら、口をあんぐり開けて驚くはずだよ）
たまらずくすりと笑ったら、小学生らしき少女に訝しげに見られてしまった。私は緩んだ口を引き結んで、書架から短歌の入門書を引き抜いた。ざっと目を通して、さくさく選んでいく。
本屋で買った帯付きの歌集と合わせて、全部で十六冊。パソコンデスクの上に、どんと山積みにして置いた。
数十首ほど鑑賞してから寝るのが、最近の日課だ。どこでも好きなページをピックアップして、自由に読めていい。
ランチのお供にしようと、オフィスに持ち込むようにもなった。
「昼休みを返上して仕事に没頭していると思ったら、優雅に読書か」
課長につっこまれて、私は手のひらサイズの歌集から視線を上げた。
「よかったら、ご覧になります？」
若手歌人の新刊を渡すと、課長が「ふむふむ」と頷いてそれっぽく詠んだ。
「なあるほどコロナ禍明けの峰さんはまあるくなった短歌のおかげ」
寧音に倣って「センスある」って言うつもりだったのに、ハハハと苦笑するしかない。
（ちょっと課長、待ってくださいよ。まあるくなったって、裏を返せば、前までつんけんしていたってことですよね？）
問いただすような眼差しを投げかけたら、あっさり交わされて

しまった。
「てっきり彼氏ができたのかと思っていたんだけどな。違ったか」
課長がぼやきながら、つまらなさそうに歌集を返してくる。
「恋はほら、タイミングだからさ。逃さずファイト！」
「やっぱタイミングかあー。課長、奥さまにビビッときたんですか」
四十歳間近で未だ独身謳歌中の係長が口を挟んで、課長が調子よく答える。
「もちろん、ビビビ婚さ」
コロナ禍を経て変わったのは、何も私だけでない。ウイルスが猛威を振るう中、みんな先の見えない不安と闘いながら、ささやかな幸せを糧に、今を精いっぱい生きている。原則的に全員出社に切り替わって、一体感が増した気がする。
課長の世界一周紀行が途絶えて、ちょっぴり残念だ。ホテルでリモートワークすることも難しくなった。だけど、航とぐっと急接近して、週末にドライブデートを楽しんでいる。
上総いちはら国府祭り、高滝ダム、市原湖畔美術館、房総十字園のみかん狩り、里山トロッコ列車……。
市原市内の観光名所をほぼすべて制覇した。
「瑞希と撮った写真、たっぷりたまったよ」
航が一眼レフカメラをいじって、指で画像をスクロールしてみせる。私は横から覗き込みながら、明るくはしゃいだ。
「きゃあ、懐かしい。ぞうさん、でっかーい」
上総更級公園近くの喫茶店で撮ったマグカップから、市原ぞうの国での最新ショットまで、大切な思い出が丸ごと詰まっている。
航と顔を近づけて、柔らかく笑い合った。
「サユリワールドでキリンやカンガルーを見たあと、ソフトクリームを食べたよな」
「ちびちび舐めてたら、溶けてあせっちゃった」
「瑞希、ポケットから出したハンカチを落とすし」
「あわてて拾おうとして、ソフトクリームもまっ逆さまに落としちゃったんだよね」
「コントっぽかったぜ」
「三秒ルールで、コーンだけはばっちり食べたもん」
私は頬を膨らませて、ぷっと吹き出した。
「さあ、こっちだよ」
「うん」
カメラのレンズを向けられて、万葉歌碑に手を添えてピースサインを決める。
ここは、阿須波神社の境内。赤い鳥居をくぐって、桜の花びらの舞いに迎えられた。市原市内最後のデートスポットだ。
「庭中の阿須波の神に小柴さし吾は斎(いわ)はむ帰り来までに」
静かに読み上げると、航がわかりやすく説明してくれた。
「九州に出向く防人が、無事に帰れることを阿須波の神に祈って詠んだ歌さ」
「そっか、なるほど」
「現代語訳すると、こんな感じ。庭の中に祀られている阿須波の神様に小枝をさして、わたしは祈ります。どうかあなたが無事に

帰って来られますように、って。旅の安全を祈るときに、神前に雑木の小さな枝を捧げる習わしだったそうだよ」
「さすが物知り博士！」
「資料を集めて、執筆のために詳しく調べたからね」
航が誇らしげにウインクしてみせる。
「平安時代にも更級日記の著者である菅原孝標の次女一行が旅の無事を願って、ここ万葉遺跡から出発したんだって」
「桜がひらひら散って、遥か昔にタイムスリップしたみたい」
歌碑をまじまじと眺めて、胸いっぱいに凛とした空気を吸い込んだ。
「今の元号の令和って、万葉集が出典元なんだよね？」
「その通り。瑞希と来れてうれしいよ」
航がはにかみがちに頭を掻いて、ジャケットのポケットに手を入れた。漆黒のベロアケースを取り出して、パカッと蓋を開ける。
プラチナの指輪だ。大粒のダイヤモンドが、キラリと光り輝く。
「瑞希といっしょに、これからも令和を過ごしていきたい」
「……航」
「俺と結婚してくれ」
「はいっ」
私は深く頷いて、朗らかに伝えた。
「どうぞよろしくね」
大きな温かい手で、左手を引き寄せられた。艶やかなエンゲージリングが、細い薬指にすっぽりと嵌まった。

のどかな五月の朝、起きがけにあくびを一つ。来月に挙式を控えて、航とアパートで同棲し始めた。
無垢材の丸テーブルに、おそろいの白いマグカップ。焼きたてのマドレーヌがのったお皿。それから、分厚いはがきの束。
結婚式の出欠が出揃った。『私たち結婚します』の後に設けた、空白の十九マス。「お幸せに」とか、「おめでとう」のメッセージが続く中、課長からも届いた。
『タイミングつかんだんだな大号泣だよ』
上司というより父親目線で書かれた返信はがきをとなりに置いて、次は――。
『私たち結婚します』
――『永遠の契りはあをき青葉風から』
「おっ、女流歌人の安斉寧音じゃん」
航が目をぱちくりさせて、はがきの端に書かれた名前を指差した。
「寧音、プロの歌人になったんだ」
私は声を弾ませて、パンと手を合わせた。
「瑞希の知り合いかい？」
「幼稚園から中学校までいっしょだったの。短歌に興味を持っていて、よく披露してくれたんだ。世界に短歌の魅力を広めようと頑張っていて、かっこいいなあー」
私はしみじみ感心しながら、懐かしい丸文字をさらりと撫でた。
もうすぐ会える。再会したら、積もる話をゆっくり語り合おう。もちろん、航との馴れ初めについても。

ホテルでメモ紙を見つけたとき、寧音の顔が浮かんで下の句を考えた。きっかけは寧音。私と航を引き寄せてくれた、大事な恩人。

式を挙げたあと、思い出深い五井駅近くのホテルに泊まる予定だ。そして、成田からハネムーンに旅立つ。

青葉風を切って、愛する人と新しいページを刻んでいきたい。

（了）